

『海の祭礼』

吉村昭 著 文春文庫 730円(本体)

幕末の米国人英語教師を通して 開国の背景を描いた歴史小説

会員 杉森 朗子 (67期)



今年2018年は、明治時代が始まった1868年から満150年を迎える節目の年にあたる。

だからというわけではないが、今年、プライベートで静岡県の下田を訪れた。下田は、言わずもがなであるが、日米和親条約によって即時開港された地である。下田の街でペリーが上陸した地を踏み、ペリー艦隊が下田条約の調印の場所となった寺まで歩いた道を歩き、日本で最初の米国領事館として境内に星条旗を掲げた寺を訪れるうちに、約200年もの間鎖国を続けていた日本がまさに開国しようとする混乱のときを肌で感じ、すっかりその時代に心を奪われてしまった。

そんなわけで、下田から帰ってきた後に開国の頃を描いた本はないかと探した結果、出会ったのが本書である。本書は、明治時代を迎えるおよそ20年前に、日本に対する憧れから漂着を装って単身で利尻島に上陸したアメリカ人青年ラナウド・マクドナルドと、英語の習得を切望する若き通詞（通訳）でその後日本開国を迎える際に通詞を担当した森山栄之助との交流と、度重なる外国人入国者・外国船に右往左往する幕府や開国に至る経過を描いた小説である。

開国に関する多くの人の理解は、ある日突然ペリー率いる黒船が浦賀に来航し、江戸中が大騒ぎになり、力を弱めていた幕府はアメリカ側の圧に押されて日米和親条約・日米修好通商条約を締結し開国した、という程度のものなのではないかと思う。しかし、実際には、ペリーが来航する前からイギリス船、

ロシア船なども交易を求めて日本を訪れていた。当時、イギリスは他国に先駆けた産業革命を背景に海上覇権をとり、インドや清、東南アジアを支配下においている。これに対して、アメリカやロシアはイギリスに後れて海外進出を図っており、いわば後進国にあたる。しかも、アメリカは、独立してわずか100年あまりの新興国でもある。では、なぜ、日本を開国させることができたのが当時大きな力をもっていたイギリスではなくアメリカだったのか。なぜ、ペリーは当時の貿易の窓口である長崎ではなく、浦賀を選んでやってきたのか。本書は、そんな疑問に対して見事に答え、当時の世界情勢や外交事情を教えてくれる。また、アメリカのペリー、ロシアのプチャーチンは、それぞれ競うように日本に開国を迫るが、その目的の違いとその裏にある国情・政策の違い、交渉方法の違いとその裏に出島から追放されたシーボルトが絡んでいたことなどは大変興味深く、これまでの断片的な知識が線になっていくような快感を覚えた。

開国により、日本には数えきれない新しい物・技術・文化が入ってきた。つまり、その新しいものの数だけ150周年を迎えるものがあるということになる。実際、内閣官房が「明治150年」関連施策として取りまとめている明治期に活躍した人や記録に光をあてた様々な講演、展示、イベントの数は実に多い。この節目となる年に、せっかくなので、もう少しこの時期の日本や諸外国の様子に浸ってみようと思っ